

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0791
施設名	キッズタウンにしおおい
施設所在地	東京都品川区西大井2-5-2 1
法人名	社会福祉法人こうほうえん

1. 活動のテーマ

自然【新たな発見】

<テーマの設定理由>

当園は、桜の木や銀杏の木、紫陽花など緑豊かな自然に囲まれている。身近な自然環境の特色を活かして子どもの興味・発見を受け止めながら成長に繋がるよう、様々な角度から子ども達の育ちを見守っている。2歳児の子ども達は、虫探しが大好き！園庭ではアリやダンゴムシ、幼虫探しを夢中とする姿があり、シャベルとバケツを持って土を掘っている子ども達。保育者が持ってきたカブトムシの成虫や青虫を見て

「これはなんだろう？」と保育者に聞きながら、日々さまざまなことを発見している子ども達の姿を見て、このテーマを設定した。

2. 活動のスケジュール

- ・一年間を通して生き物の飼育活動をする。
- ・3月末に行われる法人研究発表会にて飼育活動を通して見られた子どもの変化や保育者の役割りを発表。

3. 探究活動の実践

<準備したもの・環境設定>

園庭玩具（スコップ、バケツ）、飼育ケース、土、図鑑

<活動の内容>

虫や自然探しを目的に園庭へ探索活動に出かけた。

カブトムシや青虫の世話

<活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり>

園庭の片隅で、数人の子どもたちが夢中になって虫探しをしている。「先生、こっちにダンゴムシいたよ！」と興奮気味に声を上げる子どもの周りに、他の子どもたちが集まってくる。「どこどこ？」「わあ、丸まった！」と、発見を共有する喜びの音が響く。

石をそっと持ち上げた子が「あ、アリの巣があるかも」とつぶやくと、隣の子が「しずかに」と小声で注意する。子ども同士で観察のルールを伝え合う姿が見られることもあった。

保育者は少し離れたところから見守りながら、「その虫はどんな名前か知ってる？」「何をしているかな？」と問いかけ、子どもたちの探究心を刺激していった。虫を怖がっている子には、「先生も最初は怖かったよ。でも、そっと見るだけなら大丈夫だよ」と寄り添い、無理強いせず興味の芽を大切にしていた。

バケツを持った子が「みんなで一緒に探そう！」と声をかけると、それぞれが役割分担を始める。「僕はあっち見てくる」「ありがと！」と自然に協力する場面が見られ、発見するたびに歓声上がる。

夏の終わりに、飼育していたカブトムシが産卵した。ある日、保育者が卵の存在に気づき子どもたちに知らせ

ると笑顔で駆け寄り「本当だ、白い！」「かわいいね」と目を輝かせていた。

それから、幼虫の世話が日課となった。「今日は土を替える日だよ」「そーっと持つんだよ」と声を掛け合いながら、慎重に世話をする姿が見られた。

ある朝、登園してきた子どもたちが虫かごを覗くと、美しい蝶が羽を広げていた。「わあ！蝶々になってる！」「きれい！」「羽がキラキラしてる！」と、歓声が部屋に響き渡る。それまであまり虫に興味がなかった子も、「見せて見せて！」と集まってきていた。

保護者にもアンケートを実施すると、家庭にて飼育活動の話をすることや休日に虫探しなど生き物に触れる機会が増えたという結果が見られた。

<振り返りによって得た先生の気づき>

この活動は非認知能力の成長のきっかけになったのではないかと考えられる。毎日の世話を通じて育まれた忍耐力や責任感、生き物の変化に気づく観察力、友達と協力する協調性、命を大切にする思いやりの心など、数値では測れない重要な力が育っている。こうした非認知能力は、安定したアタッチメント関係の中でこそ育つものであり、日々の信頼関係を基盤とした保育の重要性を再認識した。

今後の課題としては、この活動で芽生えた興味や学びを、さらに広げていきたい。例えば、図鑑や絵本を活用し虫の生態について深く学んだり、観察記録を絵や文字等で表現する活動につなげることで、言語能力や表現力の活動や育成にも繋げていきたい。また、保護者にも活動の様子を丁寧に伝え、家庭でも自然との関わりを楽しめるよう支援していきたい。これらのことを法人研究発表会で紹介することにより、職員一同の学びにもつながった。

